

# アクティブ・ラーニングにおける大学図書館の役割 — ラーニング・コモンズにおける教職員協働の重要性 —

The Role of University Libraries in Active Learning

— The Importance of Cooperation between Faculty and Staff in the Learning Commons —

森藤 ちひろ\*、島田 奈美†

Chihiro Morito, Nami Shimada

本稿の目的は、教職員協働で自主学習支援施設に関する調査研究を行った成果を整理し、今後の課題を抽出することである。調査の結果、アクティブ・ラーニングの推進と学生の大学での居場所づくりにおいて、本学にラーニング・コモンズを設置し学生の主体的な学びの空間を整備することが必要であることがわかった。ラーニング・コモンズの充実には提供されるサービスの質が重要であり、その向上のために教職員協働が不可欠である。

キーワード：図書館、ラーニング・コモンズ、アクティブ・ラーニング、教職員協働

## I. 本研究の背景と目的

近年、自発的な学びの場の提供として、多くの大学においてラーニング・コモンズ<sup>1)</sup>が導入されている。ラーニング・コモンズとは、複数の学生が集まり、情報資源を活用して議論を進めていく学習スタイルを可能にする場のことであり、そこでは自主学習支援サービス<sup>2)</sup>が提供されていることが多い。平成27年度学術情報基盤実態調査<sup>3)</sup>によれば、ラーニング・コモンズとはほぼ同義の内容を指すアクティブ・ラーニング・スペース<sup>4)</sup>は、国公私立大学計779校のうち411校(52.8%)が設置しており、3年間で約2.3倍に増加したという。また、同調査によれば、アクティブ・ラーニング・スペースには、学生による主体的学習の効果を高めるための人的資源体制が構築されており、「図書館利用・文献検索サポート」、「分野別学習相談」、「ITサポート」等の学習・研究サポートが行われているという。ラーニング・コモンズのソフト面については、教員や図書館職員だけでなく、学生もサービス提供者として参画しているケースが数多く存在する。実際に学生が担当している業務例を挙げると、利用案内、ライティング指導、学習コンシェルジュなどである。

流通科学大学(以下、本学と記す)では、2015年度より「なりたい自分を発見する」ことを目

\*流通科学大学人間社会学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

†流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

指した、気づきの教育プログラムが初年次から導入されている。そのカリキュラムは、在学期間4年間に於いて「自己発見」→「なりたい自分を発見する」→「なりたい自分を確認し近づく」というステップで構成されており、いかにして学生の主体的な成長を促すかが重要な課題である。本学では、授業以外にもアクティブ・ラーニングや社会連携推進企画など多様なプログラムが提供されており、学生次第でさまざまな体験を通じた学習の機会を得ることができる。ラーニング・コモンズは、本学の教育プログラムが目指す学生の主体的な学びの場として活用されることが予測される。

本学にはアクティブ・ラーニング・エリアに類似した機能を持つ場所はあったが、ラーニング・コモンズと呼ばれるエリアは2015年4月の時点で存在しなかった。このような状況において、ラーニング・コモンズの設置とそこで提供されるべきサービスを検討していくことは、大学教育の質の向上に有効であると考えられた。

大学における教育に関しては、学生は授業を受けるだけでなく、より自発的な学習や実践の必要性が重視されてきており、大学図書館にもその支援の「場」の提供や図書館職員等による学習支援が期待されている<sup>5)</sup>。2015年4月、本学の図書館は学生の図書館利用及び貸出冊数の減少に対する何らかの対策を模索していた時期である。また、大学全体においても、教育理念やカリキュラムに合った学習空間づくりとその空間で提供されるサービスの充実が喫緊の課題であった。そのため、その解決策としてラーニング・コモンズが注目された。ラーニング・コモンズの設置は、学生の「自己発見」に寄与し、本学の教育プログラムの基本方針にも合致するものと思われた。

本学では、2015年度から、教育プログラムの開発・実践を推進する事業を支援するための予算として教育実践推進費が新設され、新しい教育プログラムの開発などが進められている。図書館・紀要委員会を中心とした本学教員10名と同職員2名で構成されたメンバーは、「学生の自主学習支援施設としてのラーニング・コモンズの設立と図書館・メディアセンターを中心とした既存施設の連携強化及び活性化」(以下、本プロジェクトと記す)を提案し、2015年度教育実践推進費を獲得した。

本プロジェクトには3つの狙いがあった。まず、1つめは学部・学年横断的な学生主体の学びの場として、既存施設を拡充したラーニング・コモンズの設立を検討することである。これまで本学で実施されてきた多数の学習プログラムへの学生の参加は、科目あるいはゼミ単位という形態が主流であった。しかし、気づきの教育では、既存の活動グループだけでなく、さらに興味関心の近い学生同士が自然発生的に交流し、主体的に学びの機会に参加していくことが望まれる。そのため、学生同士の新たな出会いと交流の場を作っていくことが重要であると考えられる。つまり、学部学科や年次の枠を越えて、学生同士が自発的かつ積極的に学びの機会を共有できる環境を整えていくことが課題の1つと言える。

そのような環境づくりにおいて欠かせないのは、ハードとソフトの両面の充実である。ハード面については、学習意欲が高まるような空間をどのようにデザインするのかということが鍵を握

ると考えられる。このことに対しては、先進事例に関する情報収集を行うと同時に、他大学の視察を行い、実際の空間を視認し経験談を聴くことが有効であろう。また、ソフト面については、学生がその空間を利用したいと感じるようなサービスとはどのようなものであるかを把握し、整備していくことが求められる。また、学生の利用しやすさを考慮しつつ、効率のかつ効果的に活用できる提供体制と運用ルールを構築していくことが重要であると考えられる。

2 つめは、既存の学習支援施設において提供されているサービスの利用状況の把握である。既存の学習支援施設の実態とそれらの施設に対する学生の評価を精査することによって、ラーニング・commonsの設置の是非やあり方が見えてくるであろう。本学では、学修支援センターをはじめとする複数の部署が学習支援に関わるプログラムを提供しているが、それらの現状と課題を分析することによって、学生のニーズが抽出できると考えられる。

3 つめは、学習支援に関する教職員協働運営体制の構築である。既に、本学の各種委員会活動などにおいて教職員協働の取り組みは行われているが、ラーニング・commonsに求められるサービスの開発と提供には、さらに教職員の連携強化が不可欠であると考えられる。学生がラーニング・commonsに集い、そこで提供されるサービスを利用したくなるような環境を維持していくためには、教職員が一緒に企画立案し、学生に対する継続的な支援体制を確立する必要がある。

この3つのねらいを達成するために、本プロジェクトでは教職員や学生に対して現状を把握することを目的とした調査を行うと共に、学生満足度の調査結果の分析を行った。また、他大学図書館の協力を得て、本プロジェクトのメンバーが先進事例の取り組みを視察させて頂いた。そして、その視察で得た情報をもとに、本学の既存資源を活用した、気づきの教育に合う図書館リニューアルの提案を行った。そこで、本稿では、本プロジェクトの活動を通じて得られた知見の整理と今後の課題の抽出を行う。次章では、2015年までの学生を対象に実施された調査結果と図書館・メディアセンターの現状を整理し、本学の課題を抽出する。

## II. 現状分析

### 1. 卒業生大学生生活満足度調査の結果

本学では学生に対して複数の意識調査を実施している。そのうちの1つに、卒業生大学生生活満足度調査<sup>6)</sup>がある。ここでは、2014年度卒業生に対する大学生生活満足度調査の結果から本学の施設や提供するサービスに対する学生の評価を見てみたい。回答の匿名性を保持した上で、有効サンプル354を用いて分析を行う。

学生の満足度の測定では、「学生生活」、「授業全体」、「研究演習(ゼミ)」、「カリキュラム」、「卒業後の進路」、「キャリア開発課の進路支援」の6項目に対する満足度が5段階で測定されている<sup>7)</sup>。「学生生活」とは、授業、クラブ、ゼミ活動など学生生活全般を指しており、本稿では「学生生活」満足度を大学生生活に対する総合的な満足度と捉えている。「授業全体」に対する満足度は、学

生が履修した授業全体に対する満足を測定している。「研究演習（ゼミ）」に対する満足度とは、2年後期、3年次のゼミ活動、4年次の卒業研究において各学生が取り組んだ内容に対する満足度を測定している。「カリキュラム」に対する満足度とは、本学の学びの体系、具体的には学部・学科やコースに対する満足を指している。「卒業後の進路」に対する満足度では、就職、進学、それ以外の卒業後に予定されている進路を卒業時においてどのように評価しているのかを測定している。いわゆる、進路決定の結果に対する満足である。そして、「卒業後の進路」に関する質問とは別にキャリア開発課の「進路支援」に対する満足度も測定している。こちらは、進路決定までのプロセスに対する満足である。調査項目別の満足度の分布は表1の通りである。

表1. 項目別の満足度の分布 (%) <sup>8)</sup>

	大変満足	満足	どちらとも いけない	不満	大変不満	平均
学生生活	20.2	57.3	17.8	2.7	1.6	3.92
授業全体	10.6	53.8	29.2	5.0	0.8	3.69
研究演習	41.1	37.9	11.1	4.0	1.6	4.18
カリキュラム	10.9	44.0	34.0	5.0	1.9	3.60
卒業後の進路	28.4	40.1	24.1	2.9	1.1	3.95
進路支援	26.3	32.1	28.4	6.9	2.7	3.75

全体として「大変満足」および「満足」の解答が大きな割合を占めているが、「大変満足」が「満足」の割合を超えている項目は研究演習のみであり、まだまだ改善の余地があるように見える。また、学生生活の満足度と他の5要素の満足度の相関は表2のような結果になった。

表2. 各要素の満足度と学生生活満足度の相関

	1	2	3	4	5
1. 学生生活	-				
2. 授業全体	.529**	-			
3. 研究演習	.401**	.375**	-		
4. カリキュラム	.480**	.654**	.346**	-	
5. 卒業後の進路	.442**	.260**	.234**	.309**	-
6. 進路支援	.411**	.336**	.263**	.397**	.388**

Spearman 順位相関係数 \*\* 1%水準で有意(両側)

総合満足にあたる「学生生活」満足度は他の5要素の満足度と全て相関が認められ、そのうち、「授業全体」に対する満足度との相関は.529であり、5要素の中で最も高かった。「授業全体」に対する満足度は、「学生生活」満足度に対する影響が他の要素よりも高い可能性が示唆された。また、「授業全体」に対する満足度と「カリキュラム」に対する満足度の相関は.654であった。この2項目の表1の平均値は、「授業全体」に対する満足度3.69、「カリキュラム」に対する満足度3.60であり、他の項目よりも低い評価になっている。授業やカリキュラムの評価は、提供される教育サービスの質そのものに加え、それらが提供される教室や使用される機器、空間の雰囲気など環境も影響を及ぼす。回答者は卒業生であり、現状とは異なる過去の授業やカリキュラムに対して評価した結果ではあるものの、この2項目の改善に向けた学びに関するハードとソフトの見直しが必要であることが示唆される。

2014年卒業生大学生生活満足度調査では、学生が大学から提供される教育サービスによって得られる価値として、学生が獲得したと知覚する知識や技術、培われた能力に関しても調査している。その調査項目は、「幅広く考える力」、「専門的知識力」、「論理的思考力」、「問題解決力」、「生活を楽しむ力」の5つである。これらは学生が知覚したサービスの成果であり、大学に対する評価の一部と捉えることできる。そこで、6つの各満足度とこれら5つの力の評価項目を用いて、学生を分類し、学生生活の過ごし方にどのような違いがあるのかについて比較を行った。

満足度6項目と大学生生活で培われた力5項目を用いてクラスター分析(Ward法)を行ったところ、3つのクラスターに分かれた。その3グループには、「学生生活」満足度の評価に差異が見られたため、高い順に、「高満足グループ」、「中満足グループ」、「低満足グループ」と名づけた。各グループの人数と学生生活満足度の評価の比率、平均、標準偏差は、「高満足グループ」67人(18.9%,  $4.54 \pm 0.659$ )、「中満足グループ」188人(53.1%,  $4.01 \pm 0.625$ )、「低満足グループ」99人(28.0%,  $3.34 \pm 0.81$ )であった。「高満足グループ」は提供されたサービスを期待以上の品質と評価し、「中満足グループ」は期待通りの品質、「低満足グループ」は期待以下の品質と評価したと推測される<sup>9)</sup>。一般的に累積的な満足は収束されるため、期待通りの満足と推測される「中満足グループ」の比率が高いことは想定内の結果である。「低満足グループ」は過剰な期待を持っているという場合もあるが、「低満足グループ」の満足をどのように高めていくのかということは、本学の重要な課題である。

図1は、各グループの6つの満足度評価の平均値を示したものである。全項目において、3グループの各項目の平均値の高低の順序は同じであることがわかる。ただし、高満足グループには、中満足・低満足グループと異なる特徴が2つ存在する。まず1つは、「卒業後の進路」と「進路支援」に対する満足が「学生生活」満足度よりも高い評価になっていることである。このことから、「卒業後の進路」と「進路支援」に対する満足は「学生生活」満足度を高める極めて重要な要因であることが示唆される。もう1つは、「卒業後の進路」と「進路支援」の2項目を比較すると、

高満足グループのみ「進路支援」に対する満足が「卒業後の進路」に対する満足よりも高くなっていることである。この結果の背景には、「進路支援」が円滑に提供されることによって、「卒業後の進路」を前向きに評価でき、あるいは満足する「卒業後の進路」を獲得しやすいということがあると考えられる。「卒業後の進路」に対する評価が「学生生活」満足度にも好影響を及ぼしていると考えられる。

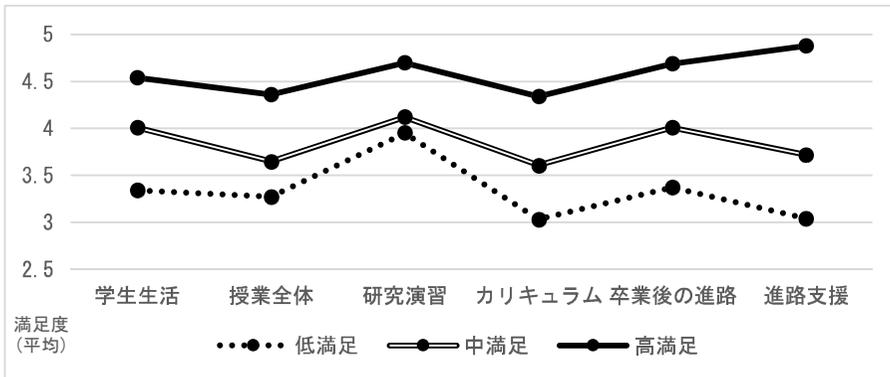


図1. 各グループの6つの満足度の平均値

図2は、各グループの大学生活で培われた力を示したものである。3グループの5項目の大学生活で培われた力の評価の平均をプロットしている。満足度評価と同様に、培われた力の全項目においても、3グループの評価の高低の順序は同じであることがわかる。「低満足グループ」の特徴として、「生活を楽しむ力」が他の培われた力の評価よりも低いという傾向が見られる。なぜ、「低満足グループ」は「生活を楽しむ力」が得られたと感じにくいのであろうか。

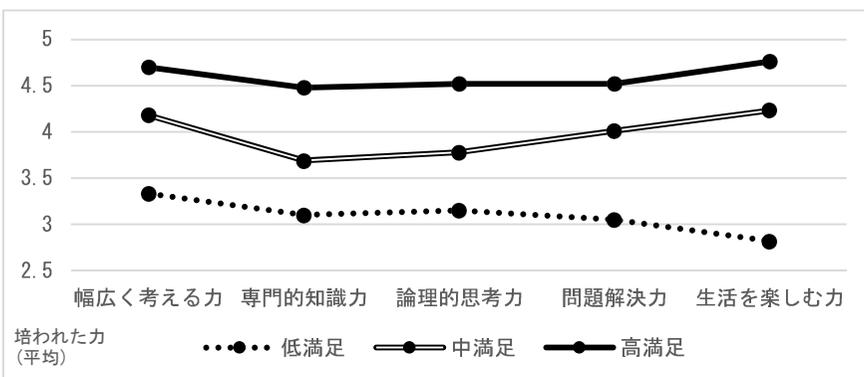


図2. 各グループの大学生活で培われた5つの力の平均値

「生活を楽しむ力」は学業だけでなく様々な課外活動への参加によって得られる力と言えるか

もしれない。図3は、大学時代に参画した制度、取り組み、行事を選択する設問<sup>10)</sup>(最大6つまで)の空白率を比較したものである。記入欄は1番目から順に6番目まで記入できるようになっており、該当の選択肢がなければ空白になる。よって、選択項目数が多いほど棒グラフは低くなる。また、設問の性質上、全グループにおいて記入欄の番号が進むにつれ空白率が高まっていく傾向にある。図3から、「低満足グループ」は「中満足グループ」「高満足グループ」に比べ、1番目から空白率が高く、2番目の記入欄では40%が空欄であることがわかる。つまり、他のグループに比べて「低満足グループ」は大学内で実施されている授業以外の学習プログラムや行事、活動への参加率が低いことがわかる。この結果は、図2の「生活を楽しむ力」の評価と無関係ではないであろう。

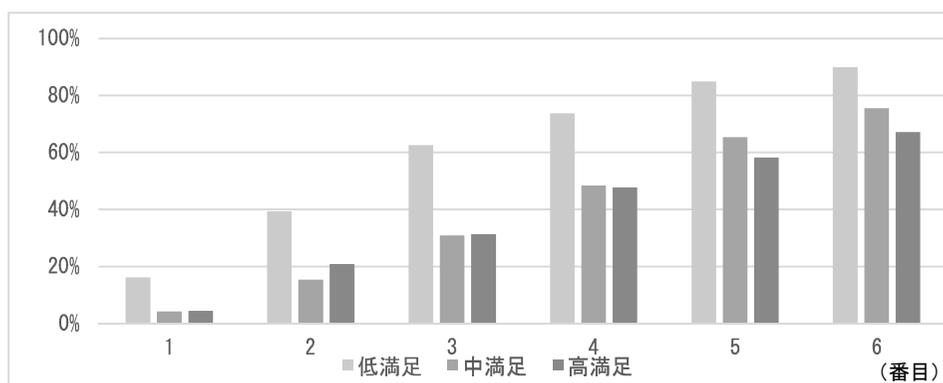


図3. 各グループのイベント・プログラム等への参加状況

以上の分析の結果から、本学の「学生生活」満足度を高めるためには、授業やカリキュラムをさらに改良し、知識や専門知識の習得、能力の向上を学生が実感できるようにすることに加え、課外活動への参加を促進させる体制を作ることが重要であると言える。本学では、実践的なカリキュラムが正課授業および課外活動として多数実施されている。しかし、その活動を実施する場が十分に用意されているだろうか。

## 2. 既存施設および体制の現状

### a. 図書館とラーニング・コモンスの現状

本学には、図書館機能として、流通科学大学附属図書館（以下、本学図書館と記す）とメディアセンターがある。本学図書館には和洋の書籍や雑誌が所蔵されており、メディアセンターには、DVDやCD、マイクロ・フィルムなどの視聴覚資料が所蔵されている<sup>11)</sup>。図4は、2011年度から2015年度の5年間の学部学生の図書館入館者数、貸出冊数、メディアセンター利用者数の推移を示したものである。本学図書館の学部学生の入館者数<sup>12)</sup>は年々減少傾向にある。2011年の本学

図書館入館者数とメディアセンター利用者数は共に約 50,000 人強であったが、本学図書館入館者数は 2015 年には 31,517 人まで減少し、貸出冊数も減少している。

一方、メディアセンターの利用者数は、横ばいもしくは微増の傾向を示している。このような推移の背景には、近年の ICT の発達や情報媒体の多様化、スマートフォンの普及など様々な要因が関係しており、学生の学習環境や情報収集手段が変化していることが挙げられるだろう<sup>13)</sup>。木下ら(2007)では、大学図書館の貸出冊数と GPA<sup>14)</sup>には強い相関があり、特にその傾向は 1 年次において顕著である<sup>15)</sup>と報告されている。本学図書館は早急に学部学生の入館者数の減少の理由を探るとともに、図書館利用を促進する方策を講じる必要に迫られていた。

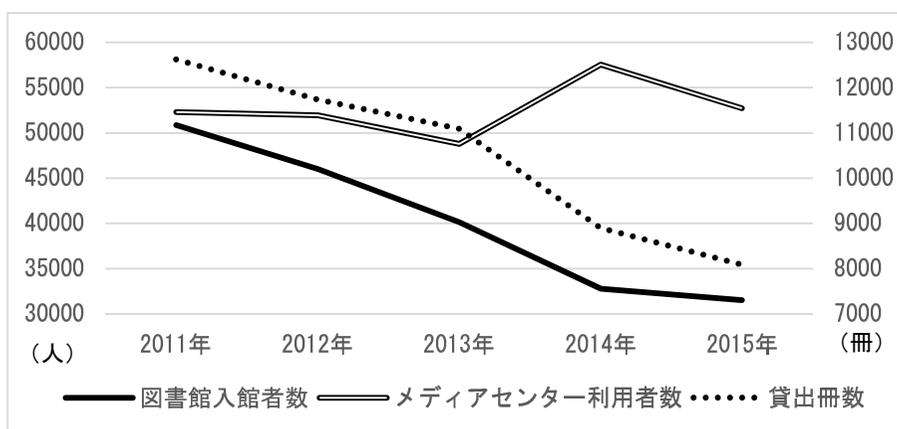


図 4. 学部学生の図書館利用人数と貸出冊数の推移

2015 年時点での本学図書館は、読書をする、あるいは個人で学習するのに適した静寂を重視する場所に位置づけられていた。また、メディアセンターには、PC グループ席 4 席と、デスクトップ PC と学習するスペースが確保された個人席 98 席があり、学生はそれらの場所で文書作成やインターネットの閲覧、映像資料の試聴等を行っていた。2015 年時点の本学図書館とメディアセンターは個別学習を前提とした空間であったため、私語と飲食が禁止され、ラーニング・commons で展開されるような学生間のディスカッションや共同作業が行える空間ではなかった。

そこで、まず学生の本学図書館の利用状況とニーズ抽出を目的に、2015 年 4 月に本学学生 2~4 年生 103 名を対象にアンケート調査を実施した。その結果によると、本学図書館の利用率は、未利用 24%、年 2~3 回利用 40%、2~3 か月に 1 回 8%、月 1 回利用 10%、月 2 回利用 4%、週 1 回 9%、週 2~3 回 4%、毎日 1%であった。サンプル数が少なく母集団を反映しきれていないとは言えないが、本学図書館が学生に有効活用されているとは言い難い状況であった。また、「図書館にどのような場になってほしいか」という質問には、「リラックスできる場所」、「居心地のよい場所」、「話ができる所」、「飲食が可能な場所」という意見が多数挙がった。

#### b. その他の施設および体制の現状

それでは、本学の学生はどこでグループ・ディスカッションや資料の作成、プレゼンテーションの練習などを行っているのでしょうか。2015年7月に本学学生の教室利用の現状を調査した。

本学には空き教室を学生に貸与する教室貸出制度があるが、事前申請制のため実際に利用している学生は僅少であった。本学学生が事前に予約なしで自由に使用することのできる場所は、食堂、学生ホール（通称：みかんホール）、学修支援センター（自己学習あるいは仲間同士のコミュニケーションの場で、アドバイザーによる学生の学修支援が受けられる）があった。食堂と学生ホールは、主に昼食や団らんに使用されており、昼食時に利用が集中していた。調査時点において、それらの場所にPCやホワイトボード、プロジェクター等ディスカッションに必要と思われる機材の設置はされていなかった。また、学修支援センターには個人の自習スペースがあり、パソコンも利用が可能な環境であったが、この空間は個人学習や先生との相談などの場所として活用されていることが多かった。他にはゼミ室が考えられたが、ゼミ室はゼミ以外の時間帯には他の授業で使用されており、学生の自由な利用は行われていなかった。

学内に設置されている学生が自由に使用できるPC総台数はコンピュータ演習室（6教室各60台）をはじめ他の演習室等複数の教室に、総学生数に対して十分と思われる台数が配置されていたが、その大半はデスクトップPCであった。持ち運びが可能なノートPCの学生への貸出は行われていなかった。つまり、本学ではアクティブ・ラーニングやさまざまなプログラムを実施しているが、学生が自由に活動できる学習スペースが十分でないことがわかった。

調査の結果、本学の既存施設ではラーニング・コモンズに必要とされる学生同士のディスカッション、プレゼンテーションなどのアウトプットなどを行う空間は見当たらなかった。今後もアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れるという教育方針である本学にとって、ハードにおいては学生の主体的な学びの空間を準備することが急務であると考えられた。

学生には、本学の実践的な取り組みへの参加を促し、学習の機会を有効活用してもらうことが重要である。そのため、学生に対し既存プログラムに関するヒアリングを行った。その結果、「プログラムが多く、自分に何が適しているのか迷う」、「類似したプログラムが複数の部署で実施されており、違いがわかりにくい」、「問い合わせ窓口がわからない」などが挙げられた。また、担当している職員にもヒアリングしたところ、「他部署が実施しているプログラムを把握しきれていない」、「案内の内容が学生に周知できているのかが把握しにくい」などの声が挙がった。多数のプログラムが実施されているが、現在の情報伝達経路では関心のある学生に効果的に情報が伝わっていない可能性が考えられた。

### 3. 大学図書館とラーニング・コモンズ

デジタル化が進む近年において、人々が図書館に求めるニーズや図書館の担う役割は変化して

いる。例えば、ニューヨーク公共図書館は、テロなどの緊急事態に際して地域に即した情報を迅速に提供したことで市民の評価が高まったことや、人と人との出会いを重視し様々な領域の人々をネットワーク化する環境づくりにも力を入れていることで知られる<sup>16)</sup>。日本においても、公立図書館は、単に本の貸出をするのではなく、人々が抱える問題の解決を手助けし、地域を支える情報拠点としての図書館ヘシフトしようという政策が立てられている<sup>17)</sup>。すなわち、図書館は知的インフラとして活用され、情報の発信基地かつコミュニティの場としての役割を担い始めているのである。これらの事例を本学の課題と照らし合わせると、図書館機能を見直すことによって、知的インフラはもとより、学生への情報発信の機能を備え、かつ学生の新たなコミュニティ形成を支援する場所になり得ると考えられる。

ラーニング・コモンズは北米の大学図書館が発祥地であり<sup>18)</sup>、情報リテラシーを学ぶ場として構成されたインフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズに進化しているという経緯がある<sup>19)</sup>。McMullen, S. (2008) では、ラーニング・コモンズの構成要素として、①コンピュータ・ワークステーション・クラスター、②サービスデスク、③協同学習スペース、④プレゼンテーションサポートセンター、⑤FDのためのインストラクショナル・テクノロジーセンター、⑥電子教室、⑦ライティングセンターとアカデミックサポート部門、⑧ミーティング、セミナー、レセプション、プログラム、文化活動のためのスペース、⑨カフェおよびラウンジの9つが示されている。

日本においては、インフォメーション・コモンズの発展形ではなく、共同学習やアクティブ・ラーニングなど近年の教育の流れを汲んでそれらを実施する空間としてラーニング・コモンズを導入している場合が少なくない。また、学生に大学に長く滞在させることを意図して、学生にとって居心地のよい空間を作ることを目的にラーニング・コモンズを導入している場合もある。ラーニング・コモンズの導入目的は、各大学の解決したい課題によって様々であり、ラーニング・コモンズの大学内での役割は事例によって差異が見られるだろう。

国際基督教大学の事例では、図書館本館に併設して建てられた新館の地下2フロアにラーニング・コモンズの役割を担うスペースが設置されている。スタディエリア、マルチメディアルーム、ヘルプデスクなどが配置されている。新館オープン後、図書館入館者数、貸出冊数の双方が約30%増加したとの報告がある<sup>20)</sup>。本学も、図書館内もしくは図書館併設でラーニング・コモンズを設置することによって、図書館の利用が促進されることが期待できる。

また、図書館内にラーニング・コモンズを設置している横浜国立大学における図書館利用スペースに関する調査では、個人学習者(3,644人)が利用する場所の上位3つは、閲覧スペース74.1%、PCスペース15.3%、リラックススペース10.1%であり、グループ学習者(725人)が利用する場所の上位3つは、リラックススペース64.0%、閲覧スペース21.9%、グループ学習室11.9%であった<sup>21)</sup>。グループ学習者の6割以上が利用しているリラックススペースとは、飲食や談話が可能な場所である。前述した本学学生に対する調査でも、飲食と会話が可能な居心地の良いスペースが

ニーズとして挙がっており、このリラックススペースと共通点が見られる。

これらの報告を例として、大学図書館とラーニング・コモンズに関する調査報告は、複数の研究者、大学、組織において行われている<sup>22) ,23) ,24) ,25) ,26)</sup>。また、文部科学省や国立・私立大学図書館協会や公立大学協会図書館協議会なども調査研究を行っている。それらの情報から大学図書館の在り方や役割が近年変化してきており、ハードに関してはラーニング・コモンズの導入というのが大きな流れである。ソフトにあたる図書館やラーニング・コモンズで提供されるサービスでは、情報リテラシー教育や自学自習する学生に対する学習支援体制など、様々な課題が浮き彫りになっている。

これらの現状分析から、本学の課題は、図書館やメディアセンター、学生ホール、学修支援センターなど既存の学習支援施設を生かしつつ、本学の教育に適したラーニング・コモンズの在り方を見つけ出し、ハードとソフトの改善を図っていくことである。そこで、本プロジェクトでは、図書館を軸として国内の大学におけるラーニング・コモンズの導入に関する調査を行った。

### Ⅲ. 調査

#### 1. 調査の概要

国内の大学図書館におけるラーニング・コモンズに関して、これまでに様々な調査が行われている。小山(2012)では、ラーニング・コモンズに関する先行研究で取り上げられている事例のうち30大学に対するWeb調査結果を考察しているが、ラーニング・コモンズの設置場所が図書館と別棟である事例は3大学であり、調査が実施された2010年においては図書館内もしくは図書館関連施設として設置される傾向が見られる<sup>27)</sup>。

本稿では、調査協力先の現地視察と聞き取り調査によって情報を収集した。調査協力先は、先進事例で取り上げられている、あるいは近年ラーニング・コモンズを設置した大学で、調査への協力にご快諾頂いた16大学である。関東7か所(亜細亜大学・お茶の水女子大学・神田外語大学・国際基督教大学・上智大学・成蹊大学・東京女子大学)、東海2か所(愛知学院大学・南山大学)、関西6か所(大手前大学・関西大学・関西学院大学・甲南大学・立命館大学・同志社大学)、九州1か所(西南学院大学)において2015年7~10月に実施した(各地域別に50音順で表記)。調査協力先には、事前に1. 図書館サービスについて 2. コモンズの運営について 3. 図書館・コモンズの課題 に関する質問票をお送りし、視察当日に可能な範囲でご回答頂いた。調査にご協力頂いた大学とその関係者の方々、各調査の実施に携わって頂いた教職員のご尽力に深く感謝申し上げます。

調査にご協力頂いた全大学が「ラーニング・コモンズ」という名称で運営されているとは限らないが、前述したMcMullen, S. (2008)のラーニング・コモンズの構成要素①~⑨<sup>28)</sup>を図書館もしくは他施設において整備されていた。学生の自主学習に関連する要素①②③に関しては、全大

学において確認された。要素④に関しては、設備の充実度において違いが見られた。要素⑤⑥については、主として教職員を対象としており、本調査では触れない。要素⑦はコモンズにおけるサービス部門にあたるが、イベントやコンテンツの充実度、スタッフの人数、学生スタッフの有無などに違いが見られた。要素⑧⑨は、コモンズ設置の経緯、設置場所や広さの問題等各大学の事情と密接に関係しており、コモンズに設置できない場合は、学内の他の場所に用意されていた。

聞き取り調査は、各大学の現状と課題に焦点をあてて行われた。紙幅の都合上、調査事例の全てをここで説明することはできないため、調査協力大学のコモンズ設置状況、設置場所のタイプ、設置時期順で並べたものを表3に示す。

表3. 視察先大学のラーニング・コモンズの設置状況<sup>29) 30)</sup>

大学名	学部学生数	設置時期	コモンズ設置場所
大手前大学	2,156	2007年	図書館
お茶の水女子大学	2,947	2007年	図書館
東京女子大学	3,958	2008年	図書館
上智大学	12,634	2009年	図書館
西南学院大学	8,150	旧図書館 2017年新図書館	図書館
国際基督教大学	2,813	2013年	図書館
愛知学院大学	11,423	2013年	図書館
立命館大学 いばらきキャンパス	32,580 (いばらき5,584)	2015年	図書館
神田外国語大学	3,886	2008年	図書館+他施設
成蹊大学	7,462	2006年図書館 2014年他施設	図書館+他施設
甲南大学	9,193	2014年図書館 2014年他施設	図書館+他施設
南山大学	9,183	図書館 2015年他施設	図書館+他施設
亜細亜大学	6,723	2014年図書館 2015年他施設	図書館+他施設
関西大学	28,568	2013,14年他施設 2015年図書館	図書館+他施設
同志社大学 今出川校地	27,053 (今出川8,317)	2013年	独立
関西学院大学 三田キャンパス	23,498 (三田4,790)	2013年	独立

コモンズ設置のきっかけは建て替えや増築の際や、記念事業としてなど様々であった。設置後の運営は、各大学によって異なり、図書館と情報センターが分担している事例もあった。ラーニ

ング・コモنزの設置場所のタイプには、図書館内もしくは図書館に併設してコモنزが設置されている事例（図書館型）、図書館と別棟にコモنزを設置されている事例（図書館＋他施設型）、別棟のコモنزが独立的に設置される事例（独立型）に大別された。図書館型と図書館＋他施設型のコモنزは、構成要素①～⑨の全部あるいは一部を図書館が役割を担っているが、独立型コモنزは建物全体が学びの空間となっており、構成要素①～⑨を図書館以外の独立した建物の中に備えていることが特徴と言えるだろう。コモنزの設置場所は、図書館を中心に設置されるケースが多いが、本調査の範囲ではあるものの、2013年頃以降になると図書館＋他施設型や独立型が出現しているように見受けられる。このような流れは、アクティブ・ラーニングの導入など教育内容と関連があると推測される。また、図書館以外の場所にコモنزを設置する背景には、既存図書館のスペースや教室の配置の問題、学生数などが関係していると考えられる。

コモنزを設置するという意思決定に関しては、共通して「学生が学習したいと思う環境づくり」や「学生にとって居心地のよい場所づくり」といった目的が含まれていた。また、図書館にラーニング・コモنزを設置した効果として共通して挙げられたことは、図書館利用者の増加であった。利用率を高める有効な策は、利用した学生の満足度を高め、新たな学生と一緒に再度利用してくれることだという。利用学生の推奨は短期間に大きな効果を発揮することもあるようである。

調査協力大学のコモنزは、設置場所のタイプに関わらず、構成要素を充実させることができていた。つまり、各構成要素を1か所に集約することが困難であっても、学内のどこかでその機能を有する空間が確保でき、その空間に関わる教職員が連携をしていくことでコモنزの活性化は可能であることを示唆している。もちろん、立地上、図書館内あるいは図書館併設でコモنزが設置されることは、図書館の利用拡大や図書館機能の拡充に有効と考えられるが、主体的な学びを促進するためにデザインされた空間の中で、いかに学習に結びつけるサービスが提供されているか、そして、その学びに対してどのような継続的な支援ができるかが重要であると考えられる。

また、課題についても大学間でいくつか共通点が抽出された。1つ目は、ハードとソフトの両立についてである。2000年以降、多くの大学でコモنزの役割を担う空間の導入がされているが、聞き取り調査では、ハード面の整備だけでは学生の利用は促進されないという共通認識が確認された。その場所で提供されるサービスや学生が自己成長を実感できることが利用率の増加に不可欠のようである。また、コンテンツの開発には教職員の協働が鍵を握るように思われる。図書館職員の授業支援やシラバスと連動した図書館サービスの実施、さらには教職員に加え学生の参画を促進する取り組みなど実践されている大学が複数あった。

## 2. 事例紹介

次に、ラーニング・コモنزの各設置場所タイプの事例を取り上げ、その特徴について見てい

きたい。ここでは、西南学院大学、亜細亜大学、関西大学、関西学院大学の4つを取り上げる。西南学院大学は図書館型であり、かつ新図書館型コモンズ設立の準備時期であったため、図書館型コモンズの利点と課題を熟知する事例として取り上げる。亜細亜大学と関西大学は、図書館＋他施設型の事例である。2大学は共に他施設コモンズが食堂の機能を持つコモンズであり、リラックスできる場所を他施設コモンズで補完していると考えられる。本学は、図書館を中心とした既存の学習支援施設でのラーニング・コモンズの導入を検討しており、かつ学生調査から居心地のよい場所が不足している点が課題として挙がっていることから、この2大学を事例として取り上げる。関西学院大学は構成要素①～⑨を全て備える独立型コモンズの事例である。本プロジェクトでは、プロジェクトメンバー全体で関西学院大学コモンズの視察を行い、空間とサービスの結びつき、教職員協働の実際について有益な情報を得たので、独立型の事例として取り上げる。

#### a. 西南学院大学（図書館型）

西南学院大学の図書館は以前から学内では最も学生が集まる場所の1つであり、図書館利用者数は年間約41万人である。図書館利用者が多い理由として、大学の担当者は、正門近くにあり立地が良いこと、図書館内に自習用PCルームが設置されていること、開館時間が午前8時30分～午後10時までとなっており、特に夜間に学生が滞在できる施設が他にないことなどを挙げている。西南学院大学図書館は学生にとって居心地の良い滞在型図書館として認識されているようであった。2015年時点の図書館（以後、旧図書館と記す）においてもラーニング・コモンズの機能を持っているが、学院100周年記念事業として新築される新図書館（2017年4月1日開館）にさらに充実したラーニング・コモンズが設置されることになっていた。

##### ・旧図書館

1階に、受付（貸出・返却・レファレンス）、視聴覚ブース、ブラウジングコーナー（雑誌・新聞）があり、空間も広く入りやすい雰囲気であった。各フロアに休憩室を設けており、私語ができる空間を作っていた。旧図書館では8:30から授業前に利用する学生が増え、開館前に並んで待っているようである。この理由については、9～17時以外の時間でPCを使用できる場所が図書館のみであること、コピー機を10台設置していることが影響していると推測されていた。学生の集まるスペースが少ないという問題に対して旧図書館が受け皿になることで、図書館利用者数の増加、滞在時間の増加に成功していた。図書館利用者が増えるとその利用者が友達を連れてくるようになり、現在では試験前は席取りをするほど利用が増えたようである。

自習用PCルームは旧図書館3階にあり、PCが120台設置されていた。自由席で学生同士が譲り合って使っていた。グループ学習室は各フロアに設置されており、前日までに予約すれば、ゼミだけでなく学生有志でも使用が可能である。ゼミや授業での利用を教員に促進しており、旧図書館内でゼミを行う教員が増えているようである。

旧図書館が行っているサービスで好評なものとして、図書館利用説明会と図書館チューター制度があった。図書館説明会は、毎年4～6月、1年生を対象に実施されている。図書館の機能や使用方法について入学後の早い段階からレクチャーすることで、その後の大学生活においても学生が図書館を活用していける素地を形成しようとしている。図書館チューターは教員の推薦によって学生の中から毎年約30名雇用されている。図書館チューターの主業務は、各学部ブースでの学生の学習相談、図書館オリエンテーションで職員の説明後のツアー対応、定期的に図書館内で開催される補習授業の担当などである。このチューターに選ばれる学生はモチベーションが高く、この図書館でのチューター経験がキャリア支援にもつながっているようである。また、学生チューターとは別に学生ボランティアがおり、こちらも学生に根づいているようである。

#### ・新図書館構想

新図書館は①学修・研究・保存の機能を強化した情報空間、②能動的学修と創造的対話を促進する交流空間、③知的刺激と想像力の解放を求めて集う遊戯空間、④過去を学び現在を見つめ未来を描く歴史空間であることを基本理念としている。新図書館では、入室退出のログを取り、学習支援促進のため、ラーニング・コモンズ、グループ学習室、ディスカッションスペース、プレゼンテーションスペース、展示スペース、多目的ホールなどを設置するという計画が進められていた。また、図書館で自学自習を進めるために、ライティング・サポートやITサポートも行うとのことであった。カフェスペースや自動販売機を図書館内に設置することも検討されていた。アクティブ・ラーニングに対応する新図書館として、1～3階をアクティブゾーンにし、2階にラーニング・コモンズを設置し、滞在型図書館を目指すという。新図書館の場所は大通りに面しているため、大学の新しい「顔」になると考えられている。そのため、ガラス張りにして内部が見えるようにすることや、一般開放の実施なども議論されていた。

#### b. 亜細亜大学(図書館+他施設型)

亜細亜大学には、附属図書館(太田耕造記念館)内とASIA PLAZA(食堂棟)内にラーニング・コモンズがある。附属図書館は、創立50周年記念事業の一環として1994年3月に建設された。地上8階地下2階建、蔵書数約67万冊、雑誌約3,000誌の最新設備を誇る図書館であり、居心地のよい図書館を目指している。亜細亜大学のシンボルとなっている。

#### ・附属図書館

学生の利用目的は、図書・新聞・雑誌・AV資料・語学資料の閲覧・視聴、図書の貸出返却、オンラインデータベース利用が主である。課題・論文等の作成のためのPC・プリンターがあり、プレゼンテーションの練習やコンテンツ作成にも利用されている。一日の入館者のピークは12時頃で約7,500名である。また、14時も約6,000名と多くなっている。さらに10時、16時にも4,000名の入館者があり、授業開始前後と昼休みの入館が多い傾向が見られる。滞在時間は60分

以上という学生が多く、120分以上が最も多い。利用者の多くは平日に集中している。

2014年4月に図書館内にラーニング・コモンズ（グループ学習エリア）が新設された時に自習PCエリアがリプレイスされた。ラーニング・コモンズではノートパソコンの貸与を受けることができる。当初、図書館内ではグループ学習ができる環境がほとんどなかったため、館内での話し声に対するクレームも多かったが、近年の学習スタイルに合わせた形で空間を分けることによって問題を解決することができたという。自習PCフロアには、128台のパソコンが設置されている。

図書館が取り組んでいるサービスの1つとして、講義との連携がある。図書館職員が情報リテラシーの講義の3コマ目に出張講義を行っている。授業の内容は、OPAC、蔵書検索を中心にPC教室にて実施している。他に図書館職員が提供する講義は、PPTの作り方等である。45名ずつ学部単位で行っているが、教員に好評とのことである。これらの講義は年末にあるプレゼン大会に向けた学習となっている。学生は、図書館内2階にあるプレゼン室等で練習を行っている。会話の頻度に応じて、ASIA PLAZAの利用に移行していくそうである。学生は「静」の図書館ラーニング・コモンズと「動」のASIA PLAZAの2つのコモンズをうまく使い分けているようである。

#### ・ASIA PLAZA（食堂棟のラーニング・コモンズ）

食堂棟にラーニング・コモンズが出来た経緯は、教員から学生がディスカッションできる場を希望する声が挙がっていたことに端を発する。既に図書館内にグループ学習エリアはあったものの、図書館内では大きな声で議論することができなかった。また飲食にも制限があり、スペースが不足していたことなども重なり、最終的に2015年4月に3階建ての食堂棟にコモンズが生まれた。

ASIA PLAZAの主なサービスは、ノートPC貸出（51台）、ホワイトボードなどの備品貸出、電子黒板とプロジェクターが利用できるエリアの利用、無料スキャナー（1台）、カラーコピー・プリントサービス（課金複合機3台）である。飲食、学習の両方に使用できるよう多種の異なるタイプの机と椅子が採用されている。例えば、固定式の椅子と机、可動式の椅子と机、机に固定されたディスプレイなどである。学生は食堂棟コモンズ内の様々な利用目的を想定して作られた各場所を、用途によって使い分けることができる。利用時間は平日9:00～20:30で座席数は371席である。食堂棟3階にはコンビニエンスストアがあり、そこで学生が飲食物、文房具などを購入し長時間過ごすことが多いようである。利用している学生に利用状況を確認すると、毎日利用しており滞在時間が長いという意見が複数あった。図書館とは離れた建物ではあるが、ゼミでの利用においても好評のようである。ASIA PLAZAでは、食事から学習への雰囲気切替をどのようにして行うかということ課題とされており、教育での更なる活用が期待されているようである。

#### c. 関西大学(図書館+他施設型)<sup>31) 32)</sup>

関西大学は大阪府に4つのキャンパスがあり、各キャンパスに図書館がある。本稿では千里山キャンパスの総合図書館ラーニング・コモンズについて報告する。千里山キャンパスには図書館

以外にも凜風館（コラボレーション・コモンズ）、ITセンターのサテライトステーション<sup>33)</sup>にコモンズが設置されている。

近年の大学図書館においてラーニング・コモンズの設置はアクティブ・ラーニングを支援するための施設として重要視されていることから、2014年度に学長の下に設けられた「図書館のあり方検討プロジェクト」で「教育と図書館」の具体的な施設としてラーニング・コモンズの設置が提案され、前述の2つのコモンズに加え2015年4月に総合図書館ラーニング・コモンズが設置された。

#### ・総合図書館コモンズ

総合図書館におけるコモンズエリアは1階に設けられている。1階にはメインカウンター、レファレンスカウンター、閲覧スペースがあるが、壁で仕切られておりコモンズで活発な議論が行われても音の影響はほとんどない。机と椅子はすべてアクティブ・ラーニングにふさわしい可動式とし、持ち込みPCにも対応すべく、Wi-Fiのアクセスポイントがコモンズ全域に用意されている。また、コモンズは以下の①~④のエリアに分割され、それぞれ別の用途に用いられる。

#### ①ワークショップ・エリア（収容人数最大80名）

マイクや大型スクリーンを備えたスタジオで、ゼミ発表やガイダンス、小グループに分かれてディスカッションができる。また、集合型イベントに加え、ホワイトボードをパーテーションとして用いることで、数人ごとのグループに分かれてワークショップ型のイベントもできる。予約が入っていないときはラーニング・エリアとして利用できる。

#### ②ワーキング・エリア

数人から数十人で利用できる大中小9つの個室があり、プロジェクター、ホワイトボードなどを利用してゼミ発表の準備やグループ学習ができる。

#### ③ラーニング・エリア

少人数でのディスカッションなどの様々なグループワークができるエリアであり、人数に合わせて自由に組み合わせができるよう様々な形のテーブルが用意されている。討論内容をメモし、パソコンの画面をプロジェクターで投影するためのホワイトボードが複数用意されている。ラーニング・エリアのコモンズカウンターではグループ学習のためのノートPC、プロジェクターなどの機器を貸し出す。

#### ④ライティング・エリア

レポート、卒業論文、授業の発表資料（レジュメ、スライド）等、日本語の文章作成について、大学院生のTAが個別にアドバイスする。

コモンズ開設に当たり教員による企画・提案や、授業に組み込まれるようシラバスへの記載を促したそうであるが、実際にはその働きかけ以上にアクティブ・ラーニングを実施していた教員による利用が多く、その後いろいろな要望や提案を受けているとのことであった。コモンズ設置

後に新たに派遣業者を通じてスタッフを採用している。学生スタッフは、カウンターに配置するスタッフが2人採用されている。シフトは1コマ2~3時間単位で組み、1週あたり1人3コマまでの範囲で組まれている。

開設してまもなく、教員や学生に浸透するまでに至っていない段階で、曜日や時間帯によってはラーニング・エリア、ワーキング・エリアが満席になることがあった。規模の大きいワークショップ・エリアについてはガイダンスの多い4月が最も利用者数が多く、1,073名（2015年時点）が利用した。その他のエリアでは、課題やレポートが課され始める6月の利用が最も多い。ペットボトル飲料以外の飲食は禁止されており、憩いの場というよりはグループ学習の場として機能している。

今後の利用者増にどのように対応していくのか、例えば、PC台数や管理方法、エリアの利用方法などが課題であり、効率的な運用を検討する必要がある。アクティブ・ラーニングの成果報告を行う際の外部の方の出入館管理についても検討の余地があるようである。

#### ・凜風館（コラボレーション・コモنز）

コラボレーション・コモنزは凜風館（食堂）1階に設置されており、飲食可のスペースである。正課・課外を問わず、学生が主体的に学び取り組む場として予約なしで自由に使える場として解放されている。コンシェルジュが利用案内を行い、ノートPCやプロジェクターなどの備品の貸出を行っている。

#### d. 関西学院大学（独立運営型）

関西学院大学には兵庫県・大阪府に4つのキャンパスがあるが、本稿では神戸三田キャンパスの「アカデミックコモنز CRESCENT」を報告する。アカデミックコモنزはキャンパス内の中央に位置し、『「学習」と「憩い」と「学生活動」』をコンセプトとした施設である。知的好奇心や学ぶ意欲を高める活動が学生・教職員一体で展開されている。「出会う→気づく→深める→形にする→共有する→出会う」を循環させ、「学びの楽しさの再発見」ができる場所を提供している。ノートPCや机上投影型プロジェクター等の貸出や無線LANを介したプリントアウトなど、機器も充実している。夜間カウンターがあり、事務室閉室後にも利用が可能になっている。

2階建てのアカデミックコモنزには、多数のエリアが存在する。例えば、バス停に隣接したクレセントラウンジには三田市で人気のカフェが来店しており、日本庭園を臨める和室もある。以下では、自主的な学びに有効に活用されている①~③のエリアについて取り上げる。

#### ①アクティブ・ラーニングゾーン

1階部分約800㎡に可動式の机と椅子、機器が配置されている。このゾーンの半分は飲食可能としており、ディスカッションやグループ学習の場であると共に、リラックスした雰囲気では話を楽しむことができる。

## ②アクティブルーム

様々な活動に利用できる 20~40 m<sup>2</sup>の複数の大小の部屋がある。予約なく自由に利用でき、利用時間の制限もない。各部屋には、ホワイトボードや長方形の机、あるいは机・椅子一体型の家具など異なる設備が設置されており、目的に合わせて使い分けがされている。

## ③プロジェクトルーム

アカデミックコモンズでは、プロジェクト（リード・タイプ、チャレンジ・タイプ、コンテスト・タイプ）の募集が行われている。プロジェクトが採択されると、助成金の支給、クレセントコーディネーターによるサポート、アカデミックコモンズの広報媒体の使用など、活動に対する様々なバックアップを受けることができる。プロジェクトルームは、リード・タイプのプロジェクトの利用が認められたエリアである。

また、学生サービスを一元的に行う事務室がコモンズ内にあることも特徴の1つである。学部事務室を除くキャンパス内の事務機能がアカデミックコモンズ内に 1.2 階に集約されて入っている。職員は、ガラス張りの事務室から常にコモンズ内に目配りをして、必要に応じて様々な活動を行っている学生とコミュニケーションを行い、学びの支援に積極的に関わっている。

毎週水曜日には CRESENT HOUR という教職員・学生が昼食を食べながら設定されたテーマについて語り合う活動が継続的に企画されている。これらの取り組みにより、学生が所属や学年を越えてコモンズに集い、参加していくプロセスが促進されている。また、月曜から金曜まで大学院生チューターによる学生相談も実施されている。アカデミックコモンズは、学生の生きた学びの場として、第1段階の「見せる（種まき）」、第2段階の「つながる（誘発）」、第3段階の「質を上げる（飛躍）」に沿った空間の設計と活動が実施されている。

アカデミックコモンズ設置前は、学生が集う場所がなく、学生は図書館もしくは食堂で課外活動を行い、図書館では音に関する問題を抱えていた。そこで、全学部の学生が通学で必ず通る場所を検討し、現在のアカデミックコモンズが新設された。準備は 2009 年から開始され、建築検討委員会から建築企画委員会の議論を経て 2013 年に完成された。設置後は、アカデミックコモンズ活性化委員会がコモンズの企画運営主体となっている。その活性化委員会のメンバーは、教員 8 名（理工学部 4、総合政策学部 4）、職員 8 名（三田キャンパス 3、図書館 1、理工学部 2、総合政策学部 2）である。活性化委員会とその委員会が企画するイベントや活動においても、教職員の協働が定着していた。

## IV. 結果と考察

### 1. 図書館・メディアセンターのリニューアル

以上の本プロジェクトにおける調査活動で得られた知見から、学生が大学を魅力的な場所として認識するために、本学にコモンズを設置することは有効であることが示唆された。コモンズの

デザインは、学生に大学での活動へ参加させ、主体的な学びを動機づけることに重要な役割を担っていると考えられる。3つのコモন্ズの設置形態（図書館型、図書館＋他施設型、独立型）を調査したが、重要なことは学びの各段階に対応する空間と機器が提供されているか、学びの過程で必要となる支援を行えているかという2点であると考えられる。

本学においては、図書館は自己学習の新たな空間として学生に認識されるよう、また各段階の学びに対応できる空間を提供できるよう、リニューアルを行う必要があると考えられた。また、図書館ではスペースに限界があることから、既存施設の有効活用によって「複数のスモール・コモন্ズの設置」が実現可能性が高い案であるという結論に至り、2015年12月15日に大学側に提案し、以下のような改善を試みた。

学生調査と他大学の視察から、本学図書館・メディアセンターのハードとソフト両者の課題が明らかになった。ハード面では、学内において居心地の良い場所がない、学生のみでグループ学習をする場所がないと学生が感じていることがわかった。そのため、その対応策として、2015年9月24日メディアセンター入口に飲食・会話が可能な「ブレイクエリア」、図書館2階奥にグループ学習ができる「グループラーニングエリア」を創設した。両エリアは共に少しずつ学生に浸透し、学生の利用は増加傾向を示した。また、2016年3月4日図書館入口にも、ガラス張りで開放感のある飲食や会話が可能な「ブレイクエリア」を創設した。こちらでも利用者が順調に増えた。

他大学では図書館もしくはラーニング・コモন্ズが主体となり、学習支援サービスを積極的に行っていた。例を挙げると、参考文献の探し方、レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルの向上、補習などのサービスである。本学でも学習支援サービスの一環として、図書館講座（例：レポート・論文作成時の図書館とメディアセンターの活用法）を開催し、2015年秋の講座では複数のゼミから応募があった。

2016年3月まで既存施設に部分的なリニューアルを施し、現場レベルで改善可能な範囲の図書館サービスの充実を図った。その後、大学から本格的な図書館リニューアル案が提示された。そして、2016年8～9月に改修工事を実施し、2016年9月16日に図書館リニューアルが完了した。リニューアル後には、グループワークに適したデスクやホワイトボードが配置され、ディスカッションが可能なガラス張りの開放的な空間が図書館入口正面に新設された。リニューアルはラーニング・コモন্ズの設置だけでなく、「一人でも居心地の良い空間」の提供というテーマも掲げていた。そこで、開放的なソファ席の「ブラウジング・エリア」、個人学習がしやすいカウンター席の「スタディエリア」、中庭に面したゆったりできるボックス席「リラックスエリア」などを新設し、グループ学習ができる部分と分離された形で、一人でも過ごしやすい空間が様々なタイプで設置された。「学生が入りたいと思う明るい空間」「グループや個人などさまざまな学習形態に対応した空間」「図書館でも会話が可能な空間」など多機能の新しい図書館に生まれ変わった。

また、書架の配置も改善を行った。雑誌架は、一般雑誌と分けて設置していた専門雑誌を全て

窓際の新書架へ配架し、バックナンバーが分かりやすいようにタイトルごとに収納できる書架に変更した。新聞架は、契約データベースの紹介ポスターを新聞架の前に掲示してデータベースへ誘導するようにした。ゼミ用書架は、ゼミ活動で利用できるように参考図書と合わせてラーニング・コモンズ・エリアに設置した。1階一般書架には、学生に積極的に利用して欲しい図書を分類別に並べ、アカデミックスキルコーナーに「知る・調べる・書く・伝える」に関する図書を設置した。

リニューアル後に実施・改善を行ったサービスは、ライブラリツアーと図書館講座の充実、授業との連携、書評コンテスト、学生の課外活動支援などである。また、提供サービスに関する情報発信も強化し、掲示物の拡充を進めている。

## 2. リニューアル後の図書館の利用状況

表4は、リニューアル前後の学部学生の図書館入館者数、貸出冊数、貸出人数の推移である。部分的なリニューアルは、2015年9月から開始された。表4を見ると、2015年10月からリニューアル工事前の2016年7月までの期間において、入館者数は全て前年度を上回っている。学生のニーズに敏感になることで少しずつ改善を試みたことは数値として表れたと言えよう。今後も、気軽に図書館に足を運びたいような空間をつくり、滞在中に居心地が良いと感じてもらえるような工夫を続けていくことで、学内にくつろげる場所がないと感じている学生やこれまで図書館を利用していなかった学生の図書館利用を向上させることが可能であると考えられる。

図書館を閉鎖した大規模なリニューアル工事は2016年8月1日～9月15日に実施された。そのため、2016年9月は半月分の数値である。図書館入館者数と貸出冊数は年々減少していたが、2016年度はその減少を食い止めることができた。表4のリニューアル後の数値を見ると、2017年(2016年度)2月頃から改善の兆しが見られる。貸出人数が増加に転じており、リニューアルが学力の向上にもつながることが期待できる。学生のニーズに敏感になり、部分的なリニューアルを行い、その後大規模な改修工事を実施したことは、学生の図書館に対するイメージや態度を変化させている可能性が示唆される。今後の入館数、貸出冊数、貸出人数の推移の変化を観察していく必要がある。入館者数と貸出冊数を増加させるには、さらに授業との連携を強化していくことが求められる。現在、気づきの教育との連携が成功しているため、さらに拡大していくことが望まれる。

表 4. リニューアル前後の図書館入館者数・貸出冊数の推移

	図書館入館者数				図書館貸出冊数				図書館貸出人数			
	2014年度	2015年度	2016年度	前年比	2014年度	2015年度	2016年度	前年比	2014年度	2015年度	2016年度	前年比
4月	3,258	2,620	3,434	1.31	882	645	709	1.10	429	350	341	0.97
5月	3,468	2,529	2,839	1.12	912	657	780	1.18	432	345	326	0.94
6月	3,769	3,783	4,126	1.09	1041	790	807	1.02	548	428	425	0.99
7月	5,826	4,509	4,891	1.09	1186	1,014	1,467	1.45	637	521	641	1.23
8月	196	312	リニューアル工事		73	159	リニューアル工事		36	65	リニューアル工事	
9月	1,430	1,361	1,614	1.19	398	364	315	0.87	212	194	188	0.97
10月	2,937	3,698	3,643	0.99	946	1,076	730	0.68	503	541	431	0.80
11月	3,600	3,656	4,199	1.15	1099	1,102	940	0.85	581	548	526	0.96
12月	3,585	3,678	3,530	0.96	1202	1,170	932	0.80	640	606	517	0.85
1月	4,049	4,479	4,360	0.97	878	865	882	1.02	444	490	396	0.81
2月	317	375	641	1.71	144	131	400	3.05	65	66	121	1.83
3月	378	517	465	0.90	135	117	212	1.81	62	62	78	1.26
合計	32,813	31,517	33,742	1.07	8,896	8,090	8,175	1.01	4589	4216	3990	0.95

※表4の数値は、学部学生のための数値

2017年4月1日には、図書館2階に学生専用自習室が新設された。指定席制でパソコン利用可とパソコン利用不可の机に分かれている。この空間が設置されたことによって図書館内に「静」と「動」の空間が整備され、学びの様々な段階に対応できる空間が充足されたことになる。

### 3. 教職員協働の意義

本プロジェクトの調査の結果、他大学では図書館もしくはラーニング・コモンズにおいて学習支援サービスが積極的に行われていることがわかった。そのサービスの多くは、授業と関連の深いものであり、図書館をはじめとする学習支援施設の職員と教員が協働して提供されている。他大学の職員から、図書館やコモンズにおける学習支援サービスの運営企画には、教員と職員の連携強化が不可欠であるというアドバイスを頂いた。本学では、アクティブ・ラーニング・プログラムをはじめとする学生の自主学習の支援に教員と多部門が関わっているが、その教職員間・部署間での情報共有や連携はまだ十分とは言えないだろう。今後、更なる図書館の改善やコモンズの充実を検討するならば、学習支援体制強化の仕組みづくりが必要であると考えられる。本学においても、教職員間の連携を強化していくことによって学習支援サービスの質を高めていくことが期待される。

学生が認識する大学サービスの価値は、授業や様々なプログラムからの学び、課外活動への参加、就職支援など多岐に渡る。その価値は、得られた結果だけでなく、その結果を得るためにどのような場所でどのように過ごしていくのかというプロセスも含まれる。そのような視点で考えた時、コモンズという空間はその価値を創造する場所であり、その価値は、教職員と学生の共創によるものである。コモンズが学生にとって魅力的な空間であり続けるためには、そこで提供されるサービス、提供する人材の質について常に改良を重ねていくことが重要である。本学の今後の方策として、コモンズ運営のための教職員組織を立ち上げる、コモンズ専用スタッフを配置する、学生スタッフの

採用を行うなどの検討や、学生の参画を促進させるプログラムの開発などが考えられるだろう。

## V. 今後の課題

本稿では、プロジェクトの活動として実施した、本学図書館・メディアセンターの利用状況と課題の抽出、図書館リニューアル案を総括し、リニューアル後の図書館の利用状況を考察した。今後の課題は、ラーニング・コモンズで提供されるサービスと、継続的に質の高いサービスを維持する人的資源の確保である。

本学で実施されている社会連携企画等のアクティブ・ラーニングへの参加は、科目履修やゼミ単位であることが多かった。これからは、それらの既存の活動主体に加え、新たな学生の交流を生み出し、多くの学びの機会を提供していくことが求められる。ラーニング・コモンズには、学生間の新しい交流や、学部を越えた学際的なグループ学習の機会を提供することも期待されている。図書館ラーニング・コモンズが、学生の自発的な学びに関する情報発信を行い、学生の自学自習の支援体制をハードとソフトの両面で行っていくことによって、居場所がなかった学生が自分の居場所を見つけたり、学生同士の絆を深められる環境を用意することができる。

また、学内には複数の自己学習支援の部署があるが、情報共有不足により学生にわかりやすく提示できていない問題点が明らかになった。ラーニング・コモンズが情報の交通整理を行うとともに、情報を集約して、発信から学生の招集、活動のサポートまでワンストップサービスで提供できる体制をつくることができれば、図書館利用者の増加、知のインフラとしての新たなポジションを獲得できると考えられる。そのためには、コモンズで実施されている内容の組織内共有の仕組みが不可欠であろう。

本稿では、図書館・紀要委員会と高等教育推進センターの活動を融合させ、在学生の学生生活支援への取り組みを考察することができた。本稿を通して本プロジェクトを総括することによって、教職員協働の取り組み、各種委員会の連携の重要性を再認識する機会となった。これからも、学生がアクティブ・ラーニングに自発的に積極的に参加できる環境整備を目指して、教職員一丸となって取り組んでいきたい。

## 謝辞

本稿は、2015年度教育実践推進費「学生の自主学習支援施設としてのラーニング・コモンズの設立と図書館・メディアセンターを中心とした既存施設の連携強化及び活性化」（代表者：森藤ひろ 構成員：岩崎久志，井上芳郎，小畑徳彦，島田奈美，羽森直子，小塚匡文，蜂屋真，神尾和寿，藤原喜美子，株本芳宏，杉野亜希）の成果の一部です。本稿の作成にあたり、視察先大学の教職員の皆様をはじめ多くの方々にご協力を頂きました。また、構成員の方々には、プロジェクトの活動に多大なご尽力を賜りました。この場を借りて心より感謝申し上げます。また、本稿

の学生アンケート調査は高等教育推進センターからデータを拝借し、図書館統計データは本学図書館事務局より拝借しました。厚く御礼申し上げます。

#### 引用文献、注

- 1) 文部科学省の用語解説によると、ラーニング・コモンズとは、「複数の学生が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの。その際、コンピュータ設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを使った学生の自学自習を支援する図書館職員によるサービスも提供する。」という。
- 2) 本稿では学生の自学自習を支援するという観点から議論においては「学習支援」という表現を用いている。本学の履修相談や学生生活全般を支援する学修支援センターは、名称の通り「学修支援」としている。
- 3) 文部科学省：「平成 27 年度学術情報基盤実態調査」(2016)  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2016/03/30/1368699\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2016/03/30/1368699_1.pdf), 2017 年 3 月 17 日取得。
- 4) 27 年度学術情報基盤実態調査では、アクティブ・ラーニング・スペースとは、「複数の学生が集まり、様々な情報資源を活用しつつ議論を進めていく学習スタイルを可能にするスペース」と説明されている。
- 5) 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会：「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－平成 22 年 12 月」,  
<http://www.janul.jp/j/documents/mext/singi201012.pdf>, 2017 年 3 月 17 日取得。
- 6) 卒業生大学生活満足度調査は高等教育推進センターが卒業生を対象に実施している調査である。高等教育推進センターより匿名性を保持した状態でデータを御提供頂いた。
- 7) 学生生活、授業全体、研究演習（ゼミ）、カリキュラム、卒業の進路、進路支援に対する満足は、1（大変不満）～5（大変満足）、また、幅広く考える力、専門的知識力、論理的思考力、問題解決力、生活を楽しむ力は、1（全く実感できない）～5（とても実感できる）のリッカート尺度で測定されている。
- 8) 本表では無回答を省いているため、割合合計が 100%にならない。平均は 5 段階評価の平均値である。
- 9) 「期待」の取り扱い、「満足」に関しては、森藤ちひろ：「マーケティングにおける期待の重要性」『経営戦略研究』, 3（2009）21-34. を参照されたい。
- 10) 学生時代に参画した制度、取り組み、行事の選択肢の例は、学生チューター、クラブ、資格取得、学生チャレンジプロジェクト、企業実習、オープンキャンパススタッフ、学園祭、社会連携プログラムなどである。
- 11) 2015 年 3 月 31 日現在の図書館の蔵書数は、図書 200,183 冊（和書 159,951 冊、洋書 40,232 冊）、雑誌 1,769 冊（輪雑誌 1,188 冊、洋雑誌 581 冊）である。メディアセンターの所蔵資料は、DVD1360 点、CD1,293 点、マイクロ・フィルム 1,053 点、CD/DVD-ROM441 点、定期購読 87 点、レーザーディスク 86 点である。
- 12) 流通科学大学附属図書館の入館者数は、流通科学大学附属図書館事務局よりご提供頂いたデータである。
- 13) 学部学生数は 2011 年 3,932 人から 2015 年 3,160 人に 5 年間で 772 人減少している。この学生数の減少も図書館入館者数と貸出冊数が減少に影響していると考えられる。
- 14) GPA は Grade Point Average の略で、GPA とは大学で採用されている成績評価方式の 1 つである。
- 15) 木下裕子、伊藤昭、大島英穂、島井真木：「学生の「学びの形成」を支援する図書館～主体性の確立をめざして～」、『大学行政研究』, 2 号（2007）31-45.
- 16) 菅谷明子：『未来をつくる図書館』（岩波書店、2003）p.6-8.

- 17) 猪谷千香：『つながる図書館』（筑摩書房，2014）p.14-15.
- 18) 国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会：「ラーニング・コモンズの在り方に関する提言 実践事例普遍化小委員会報告 平成 27 年 3 月」<http://www.janul.jp/j/projects/sftl/sftl201503a.pdf>, 2017 年 3 月 17 日取得.
- 19) 山内祐平：「ラーニングコモンズと学習支援」, 『情報の科学と技術』, 61, 12 (2011) 478-482.
- 20) 米澤誠：「教育改革 ing (大学図書館)」, 『Guideline』, 11 月号 (2009) 46-53.
- 21) 立石亜紀子：「大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態—横浜国立大学附属図書館における観察調査」, 『三田図書館・情報学会』, 67 (2012) 39-61.
- 22) 上田直人, 長谷川豊祐：「わが国の大学図書館におけるラーニング・コモンズの事例研究」, 『名古屋大学附属図書館研究年報』, 7 号 (2008) 47-62.
- 23) 千葉美保子, 松井きょう子, 中沢正江：「多様な学習スペースを活用した学習支援・教育支援の試み—雄飛館ラーニングコモンズにおける新たな学びへの支援—」, 『高等教育フォーラム』, Vol.5(2015)47-56.
- 24) 中沢正江, 児玉英明, 池田恵子, 小倉都子, 篠崎大司, 今井美裕子, 藤原めぐみ：「主体的に学び、学び続ける活力を得られる学習場—『ラーニングコモンズ』の構築に向けたヒアリング調査報告—」, 『高等教育フォーラム』, Vol.3 (2013) 65-80.
- 25) 長澤多代：「主体的な学びを支える大学図書館の学修・教育支援機能」, 『京都大学高等教育研究』, 19 (2013) 99-110.
- 26) 米澤誠：「ラーニング・コモンズの本質：ICT 時代における 情報リテラシー／オープン教育を実現する基盤施設としての図書館」, 『名古屋大学附属図書館研究年報』, 7 (2008) 35-45.
- 27) 小山憲司：「国内の大学図書館におけるラーニング・コモンズの現状」, 『ラーニング・コモンズ 大学図書館の新しいかたち』, (勁草書房, 2012) 203-269.
- 28) 表 3 の構成要素①～⑨の判断は、筆者らが視察時期において設置されていると認識したものである。
- 29) 表 3 の学生数は、各大学ホームページに公表されている 2016 年 5 月 1 日現在の学部学生数である。(同志社大学は 2016 年 4 月 30 日現在)。
- 30) 構成要素①～⑨は、以下のような場所及び体制を指している。①図書館内において学生の学習環境に合わせて機能的に PC やデスクが配置されている場所 ②図書館利用や資料検索、PC の操作などについて各専門家が支援する体制 ③椅子やテーブル、ホワイトボード、プロジェクターなどが設置されているグループ学習のためのスペース ④プレゼンテーションの準備（資料作成、印刷、映像音声の編集など）をサポートする設備 ⑤教員の講義運営や研究活動に対する技術的なサポート体制 ⑥情報リテラシー教育に加え教職員の情報技術のトレーニングなどの機能 ⑦学生に対するライティング指導や学習相談などのアカデミックサポート体制 ⑧学生や教員などの大学構成員間の交流（学習成果発表やその他イベントなどを行う場所） ⑨学生が休息したり、議論を行うことができる飲食可能なスペースである。詳細は、McMullen, Susa: “US Academic Libraries: Today’s Learning Commons Model”, PEB Exchange, OECD (2008) を参照のこと。
- 31) 関西大学図書館自己点検・評価委員会：「図書館自己点検・評価について」『関西大学図書館フォーラム 2015』, 第 20 号 (2015) 33-52.
- 32) 広瀬雅子：「総合図書館ラーニング・コモンズについて」, 『関西大学図書館フォーラム 2015』, 第 20 号 (2015) 53-56.
- 33) サテライトステーションは、本学におけるメディアセンターに相当する。